

共通テスト 対策問題集

2025

4



SERIES

国語

現代文

I シリーズ

河合出版編集部 編

I 004-024



* 3 2 4 9 0 8 1 0 0 4 0 2 4 *

河合出版

共通テスト対策問題集

Vol.4

国語 現代文（論理的文章・文学的文章・実用的文章）

はじめに

本問題集は、「共通テスト」の出題形式・内容に「慣れ」、不得意な形式や分野を「克服」して、共通テストへの総合力アップを目指すための「解法」を重視した問題集です。

本書の特徴

多様な出題傾向にも対応

収録問題は共通テストを想定し、本問題集のために作成した問題で構成されています。繰り返し取り組むことで現代文の問題形式に「慣れ」しましょう。

難易度表示

それぞれの問題にはその問題の難易度を示す☆をつけました。

★☆☆…基本問題

★★☆…発展問題

★★★…応用問題

自学自習も可能な丁寧な解説

本問題集の解説は正解のみならず、「なぜ間違いか」まで掘り下げた詳しく丁寧な解説で「自学自習」用として使用することもできます。

目次

論理的文章

1	「心のたなびき」 鷲田清一	4
2	「承認をめぐる病」 斎藤環	13
3	「科学と人間の不協和音」 池内了	25
4	「ダ・ヴィンチの蝶」 福岡伸一・ 「人間にとって科学とは何か」 村上陽一郎	36
5	「『家事のしすぎ』が日本を滅ぼす」 佐光紀子・ 「暮らし」 阿部純・「日用品のデザイン思想」 柏木博	49
6	「贈与の系譜学」 湯浅博雄・ 「贈与の歴史学 儀礼と経済のあいだ」 桜井英治	61
7	「『生きた風景』へ」 中井祐	71
8	「文化を交叉させる 人類学者の眼」 川田順造	84
9	「アート・ヒステリー」 大野左紀子	94
10	「非常識な建築業界」 森山高至・「建築を愛する人の十二章」 香山壽夫	104

文学的文章

11	「生きるほくら」 原田マハ	118
12	「土」 長塚節	130
13	「マイマイ新子」 高樹のぶ子	139
14	「枯木の花」 木山捷平	152
15	「沈黙」 遠藤周作	166
16	「お時儀」 芥川龍之介	179
17	「ロクタル管の話」 柴田翔	189
18	「たずねびと」 太宰治	198
19	「熊出没注意」・「作品の履歴書としてのあとがき」 南木佳士	208
20	「涙が涸れる」・「詩とはなにか」 吉本隆明	217

群馬県の高校で学ぶAさんは、新聞で林業についての連載記事を読み、日本の林業について考察してみた。以下に示す【文章Ⅰ】
 【文章Ⅱ】は、Aさんの読んだ新聞記事の一部、【文章Ⅲ】および【グラフ1】～【グラフ4】は、Aさんが林業について調べたときに参考にした『日本経済図説』からの抜粋である。これらを読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。

【文章Ⅰ】

栃木県との県境にそびえる根本山(1199メートル)。昨年12月上旬、桐生川源流の森に分け入ると、樹皮が大きくはがされたスギが目の前に現れた。「鹿やクマの食害によるものです。こうなると木材としての価値はなくなってしまいます」。林業コンサルタント、武井沙織さん(44)はそう言って、高さ数十メートルもあるスギを見上げた。

武井さんは会社員の家庭に生まれ、前橋女子高、岩手大農学部に進んだ。大学在学中に桐生市北部の石鴨地区で林業を営む藤生順朗さん、洋子さん夫妻と出会ったことが一つの転機となる。当時は、原材料への関心が薄れ、低コストで工期短縮を図る住宅建設の工法に変化した時代。「山から切り出した木材がどこに運ばれて製品になっているのか分からない」という藤生さんの疑問に共感した人たちが集まり、家づくりの過程に関わる全ての人と「顔が見える」信頼関係を築こうと議論を重ねていた。武井さんも手伝いしながら、森林資源の活用について知見を深めた。

その後、青年海外協力隊として中米ニカラグアに赴任したのをきっかけに活動の場を海外に移し、マラウイやイランで働いた。違法伐採が横行する現実を目の当たりにしたほか、無計画な放牧により緑地が砂漠化し、雪解け水が土石流となって大きな人的被害をもたらすことも知った。

現地の自治体や住民の協力を得て荒廃した農地の再生を図るために植林や苗の生育を進めようと活動してきたが、その日の収入が必要な住民にはなかなか受け入れられなかった。住民が経済的に潤う仕組みを作る重要性を痛感した。

状況は違えど、国内の林業が抱える悩みも共通点があった。高度成長期に建設用材を確保するためスギやヒノキを集中して植える

★★★

解答時間
10分

/ 20

140 解説
ページ

林業政策を続けたため「樹種が偏って根の張り方も一様になり、災害時に砂防の機能を果たせない」。伐採や多品種の植林を計画的に進め、持続可能な森林を人の手で作るためには――。身近にある森林という「宝」をもっと生かすにはどうしたらいいか。そう自身に問いかけながら、今日も畑に立つ。(大澤孝二)

〔毎日新聞〕群馬版 二〇二三年一月七日

【文章Ⅱ】

林業になじみはなく、仕事にするつもりもなかった。だが、山林面積が9割を占める南牧村^{なまちく}で、70代の男性に連れられて山に入り、考えが変わった。そこで目にしたのは、木々がなく、地面がむき出しになった山肌だ。「山と人との向き合い方を考え直さなければ」。横浜市から村に移住し、林業の会社を設立した。視線の向こうには、100年先の山がある。

造林を手掛ける「サンエイト企画」代表の古川拓さん(28)が南牧村を初めて訪れたのは2015年3月。当時は慶応大3年生で、ゼミ活動の一環だった。14年に民間のシンクタンクが発表した「消滅可能性都市」に村が載り、興味を持った。

大学卒業後、「縁のある群馬で仕事を持つ」と思い立った。偶然、連れて行ってもらった山で「人の手が入らなくなると山がはげる」と教わった。山林の放置は、自然災害につながる。村では07年の台風9号による土砂崩れや倒木で一部が孤立。「山林の荒廃が災害の引き金になっている」と指摘されていた。

20年1月から林業に関わり始め、21年3月、地元の人らと会社を設立した。南牧村と下仁田町^{しもにた}の山林で杉やヒノキ、コナラの苗を植え、雑草刈りや害獣対策を施す。村の山は50年ほど前、当時高値で売れた杉がたくさん植えられた。今も残っているが「昔と比べて木材価格は落ち、林業従事者も減少している。森林資源の価値を高めたい」。会社は林業の他にも、キャンプ場や、まきで燃す石窯焼きのパン屋を運営しており、「木を使うのが当たり前前の社会にしたい」と話す。(川地隆史)

〔毎日新聞〕群馬版 二〇二三年一月四日

【文章Ⅲ】

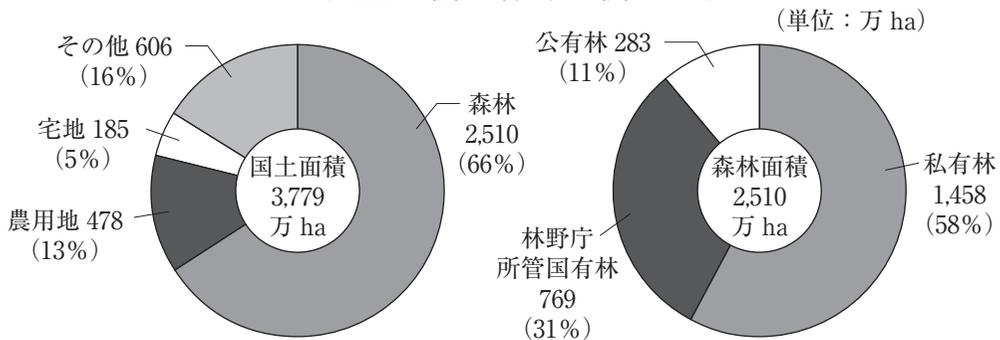
わが国の国土の六六%、二五・一百万平方メートルは森林である、緑が少ないわけではない。しかし、その保全と利用には問題が多い。戦前、戦中そして終戦直後の薪炭利用などのための大量伐採と手入れ不十分は著しく森林を荒廃させ、自然災害を多発させる原因ともなった。現在、一〇〇〇万ヘクタール（二〇百万平方メートル）を越える人工林が造成されていて、二一世紀には国産材で需要をまかなうことになっているが、まだ育成途上にあるうえに間伐や手入れの不十分さで、状況はよくなっていない。

木材需要は、高度成長期の住宅建築物を中心に、一九七三年に約一・二億立方メートルのピークを示した。しかし内地材でまかなえず、自由化もあって輸入が急増し、この年、自給率は三五%にまで低下した。その後も八〇年代、九〇年代を通して自給率は低下し、二〇%を切るまでになったが、二〇〇〇年以降若干持ち直し一一年は二六・六%になった。

生産面についてみると、人件費が大きい林業経営費の増大、人手不足などから林業収益が悪化し、間伐・保育など管理面で問題が多い。需要に対応できないだけでなく、森林資源の荒廃がとどまらないのではないかと懸念されている。

グラフ1

国土面積と森林面積の内訳

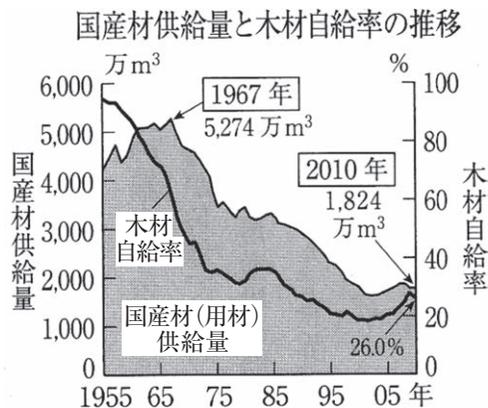


注：1) 国土面積は2005年10月1日現在の数値。

2) 森林面積は2007年3月31日現在の数値。

資料：国土交通省「平成19年度土地に関する動向」、林野庁「森林・林業統計要覧2011」

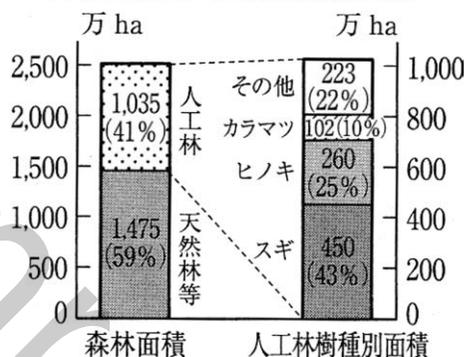
グラフ2



資料：林野庁「木材需給表」

グラフ3

森林面積と人工林樹種別面積



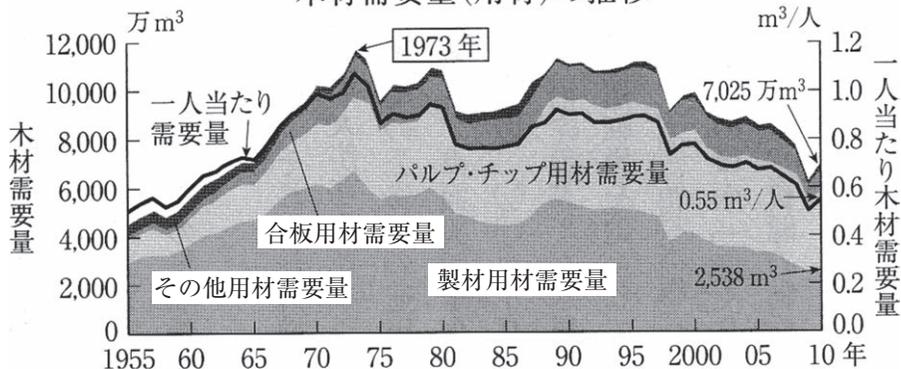
注：2007年3月31日現在の数値。

資料：林野庁「森林・林業統計要覧2011」

出所：林野庁「平成24年度森林・林業白書」

グラフ4

木材需要量(用材)の推移



資料：林野庁「木材需給表」

*ピーク時(1973年)の木材需要量の総量は、約12,000万m³

問1 【文章Ⅰ】に傍線部A「樹皮が大きくはがされたスギ」とあるが、次のア～エの各文は、「スギ（杉）」について、Aさんが【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】、および【グラフ1】～【グラフ4】から読み取ったことをまとめたものである。【凡例】に基づいて各文の内容の正誤を判断したとき、その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。

【凡例】

正 し い——述べられている内容は、正しい。
 誤 っ て い る——述べられている内容は、誤っている。
 判 断 で き な い——述べられている内容の正誤について、【文章】および【グラフ】からは判断できない。

ア 日本ではスギが建設用材として多く使われており、日本の森林に自生している樹木の4割強はスギである。
 イ 一九七〇年代にはスギを多く植える政策がとられたが、それは、建設用材としての需要が高まったためである。
 ウ スギの植林は国の政策として行われたため、スギは私有林よりも国有林・公有林で多く見られる。
 エ 現在でもスギは珍しくないが、高度経済成長期においては、その製材は現在に比べると高値で取引とりひきされていた。

- | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|
| ① | ア 正しい | イ 判断できない | ウ 誤っている | エ 正しい |
| ② | ア 誤っている | イ 正しい | ウ 判断できない | エ 正しい |
| ③ | ア 判断できない | イ 正しい | ウ 正しい | エ 誤っている |
| ④ | ア 正しい | イ 判断できない | ウ 誤っている | エ 判断できない |
| ⑤ | ア 誤っている | イ 正しい | ウ 正しい | エ 判断できない |

問2

【文章Ⅰ】に傍線部B「当時は、原材料への関心が薄れ、低コストで工期短縮を図る住宅建設の工法に変化した時代。」とあるが、「当時」の日本の森林・林業・木材について「グラフ1」～「グラフ4」から読み取れることを述べたものとして正しいものが、次のア～エの中に二つある。その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。

ア 木材の自給率は、5割を下回っていた。

イ パルプ・チップ用材の需要量は、製材用材の需要量の2倍ほどであった。

ウ 国土面積における森林の面積と農地の面積の比率が逆転しはじめた時代だった。

エ 国産材の供給量が、高度経済成長期よりも少なくなっていた。

- ① ア・イ
- ② ア・ウ
- ③ ア・エ
- ④ イ・ウ
- ⑤ イ・エ
- ⑥ ウ・エ

問3

Aさんたちは、【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】および【グラフ1】～【グラフ4】を読んで、わかったことを語り合った。発言内容が誤っているものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

- ① Aさん——木材は私たちの生活に欠かせないものだと思うけれど、その木材を生み出す林業にも、さまざまな問題があるんですね。
- ② Bさん——日本にはスギやヒノキが多いようだけれど、少ない種類の樹木を集中して植えることが災害時の砂防機能を低下させるなんて、知らなかったなあ。
- ③ Cさん——だからこそも、少ない樹種が植えられることの多い人工林を減らして、天然林を増やそうという政策がとられているんだよね。
- ④ Dさん——ただ、そうはいつでも、日本の木材需要量は増加の一途をたどってきたわけだから、すぐに人工林を減らすというわけにもいかないんじゃないかな。
- ⑤ Aさん——いまある山林を私たちにとってより望ましいものにする 것도、重要ですよ。山林の放置は自然災害にもつながるわけですから。
- ⑥ Bさん——森林は私たちの身近にあるものですが、大きな可能性をもっている。持続可能な森林を作り出すことは、その可能性をひろげることでもあるんだと思います。

実用的文章

21	「日本の林業」	226
22	「外来生物」	233



9784777227594

ISBN978-4-7772-2759-4
C7381 ¥1000E



1927381010000

税込定価1100円



国語

現代文



KAWAI PUBLISHING

学
年

組

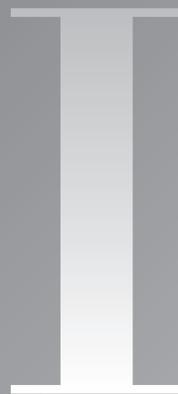
番
号

名
前

共通テスト
対策問題集

2025

4



SERIES

国語

現代文

解答・解説編

I シリーズ

河合出版編集部 編

I 004-A24



* 3 2 4 9 0 8 1 0 0 4 A 2 4 *

河合出版

21 「日本の林業」

設問	問3		問2	問1	正解	配点	自己採点
	④	③	③	②			
自己採点合計	5	5	5	5			

※の正解は、順序を問わない。

【出典】

文章Ⅰ 『毎日新聞』群馬版二〇一三年一月七日〈森林はいま 4〉「桐生・林業コンサルタント 武井沙織さん 持続可能な「山」模索 国際経験生かし、古里に貢献」。出題の都合で、途中、一部を省略している。

文章Ⅱ 『毎日新聞』群馬版二〇一三年一月四日〈森林はいま 2〉「南牧に移住し会社設立 古川拓さん 100年先の山を見据え 荒廃防ぎ、資源価値向上へ」。出題の都合で、途中、一部を省略している。

文章Ⅲ・グラフィックグラフィック 宮崎勇・本庄真・田谷慎三 『日本経済図説 第四版』（岩波新書二〇一三年）より、Ⅲ「食生活と第一次産業」のうち⑧「林業」から抜粋。

【本文解説——文章Ⅰ】

リード文にあるとおり、文章Ⅰと文章Ⅱは、新聞に掲載された「林業についての連載記事」である。そしてこの文章Ⅰでは、「林業コンサルタント、武井沙織さん」が紹介され、彼女の知見を通して、森林資源や林業にはどのような問題があるかといったことが説明されている。その問題点を列挙すると、次のようになる。

・ 樹木は「鹿やクマの食害」を受けることがあるが、そうになると「木材としての価値はなくなつて」しまう（第1段落）。

・ 海外では「違法伐採」の横行が見られる場合があるが（第3段落）、そうした土地で「荒廃した農地の再生を図るために植林や苗の生育を進めよう」としても、「樹木や苗が育ちそれが収益に結びつくまでには時間がかかってしまうため）その日の収入が必要な住民にはなかなか受け入れられない」（第3・第4段落）。

・ 日本では高度成長期に、「建設用材を確保するためスギやヒノキを集中して植える林業政策」が続けられ、そのため森林の「樹種が偏つて根の張り方も一様になり」、森林が「災害時に砂防の機能を果たせない」といった状況が生じている（最終段落）。

そして本文は、「身近にある森林という『宝』をもっと生かすにはどうしたらいいか」と問いかける武井さんの姿を描写して終わっている。

【本文解説——文章Ⅱ】

こちらの文章では、「横浜市から（群馬県の）村に移住し、林業の会社を設立した」「古川拓さん」のことが紹介され、やはり文章Ⅰと同様、森林資源や林業における問題点などが説明されている。整理してみよう。

・ いまの日本で山に入ると、「木々がなく、地面がむき出しになった山肌」が見られることがある（第1段落）。このように「人の手が入らなくなると山がはげる」が、そうした「山林の放置」は「土砂崩れや倒木」などの「自然災害につながる」（第3段落）。

・ 村の山には、50年ほど前に、「当時高値で売れた」という理由で「杉がたくさん植えられ」、それらがいまも残っているが、「昔と比べて木材価格は落ち、林業従事者も減少している」（最終段落）。

そして最終段落では、「森林資源の価値を高めたい」「木を使うのが当たり前の社会にしたい」という古川さんの言葉が紹介されている。

【本文解説——文章Ⅲ】

あらためて問題全体の最初にあるリード文を見てみると、「**文章Ⅲ**」および**グラフ1**と**グラフ4**は、どれも『日本経済図説』という一冊の書籍から抜粋されたものだということがわかる。したがって、この文章を読む際にはグラフと関係づけながら読むべきであろう。このことに注意しながら、本文の内容を確認していきたい。

まず第1段落を読むと、冒頭に「わが国の国土の六六%」は「森林である」と述べられており、これについて図示しているのが**グラフ1**の左側の円グラフだということがわかる。また、この段落の途中では「現在、一〇〇万ヘクタール（一〇万平方キロメートル）を越える人工林が造成されて」と述べられているが、これは**グラフ3**と関連する記述である。さらに同じ段落の末尾には「二一世紀には国産材で需要をまかなうことになっているが…状況はよくならない」とあり、これは「木材自給率」について図示した**グラフ2**と関連するものとわかる。

次に第2段落を読むと、冒頭の一文は「木材需要は、高度成長期の住宅建築物を中心に、一九七三年に約一・二億立方メートルのピークを示した」となっており、これは、国産材の供給量などについて図示した**グラフ2**や、**グラフ4**に関する説明だとわかる。同じ段落の二つ目の文は、木材の「自給率」についての説明となっており、これは**グラフ2**に関連するものである。

そして最終段落には、現在の日本の林業が「需要に対応できない」という指摘があるが、これは「木材需要量」について図示した**グラフ4**に関わるものだということがわかるだろう。

このように本文とグラフとの関係を確認し、本文を手がかりにしてグラフを読み取りながら、設問を解くことが肝要である。

【設問解説】

問1 「スギ(杉)」について説明した文の正誤を判定する問題

設問にあるとおり、ア～エの各文は「Aさんが**文章Ⅰ**」と「**文章Ⅲ**」、および**グラフ1**と**グラフ4**から読み取ったことをまとめたもの」だということ定になっている。したがって、この問題に答えるには、ア～エの各文につ

いて、三つの文章と四つのグラフすべてと照合しながら正誤を判定しなければならぬ。面倒ではあるが、共通テストの第3問ではこうした面倒な作業がしばしば要求されるということを覚えておいてほしい。各文の内容について検討してみよう。

ア 「日本の森林に自生している樹木の4割強はスギである」が、**グラフ3**で示されていることと一致しない。このグラフの左側の棒は「森林面積」における「人工林」と「天然林等」の割合を示したものが、その「人工林」のところから点線が伸びて、右側の棒に至っている。したがって右側の棒は、「人工林」の中でスギやヒノキなどがどれくらいの割合になっているかを示したものとわかる（右の棒の下に「人工林樹種別面積」とあることから、そのことはいかかである）。つまり、右の棒にスギが43%と書かれているのは、日本における人工林における樹木の4割強がスギである」ということを意味していると考えられる。ところがアの文は、「日本の森林に自生している樹木の4割強はスギである」となっている。「自生」とは一般に（人為によらず天然のまま生きている）という意味だから、アの文には「天然林等」のうちの4割強がスギだと書かれているということになり、グラフの内容と食い違ってしまう。かりに「自生」という言葉を（最初は人工的に植えられたけれどもその後は人の手を借りずに生きている）という意味にとったとしても、「森林面積」全体の中のスギの割合は**グラフ**に示されていないのだから、やはりアの文に書かれていることが正しいとはいえないということになる。以上のことから、アの文の内容は「誤っている」または「判断できない」ことがわかる。

イ **文章Ⅰ**の最終段落に「高度成長期に建設用材を確保するためスギやヒノキを集中して植える林業政策を続けた」とあり、**文章Ⅱ**の最終段落にも「50年ほど前、当時高値で売れた杉がたくさん植えられた」とある。**文章Ⅱ**は「二〇二三年」に新聞に載ったものだとあるので、その「50年ほど前」は一九七〇年代である。したがって、イの文の「一九七〇年代」に「建設用材としての需要が高まった」ため「スギを多く植える政策がとられた」というのは、正しい説明だと判断できる。これは「正しい」ものである。

ウ 「スギの植林」が「国の政策」であったということは、たしかに文章Ⅰの最終段落で述べられていた。しかし、そのためにスギが「私有林よりも国有林・公有林で多く見られる」ようになっていくかどうかは、どの文章からどのグラフからもわからない。「私有林」「林野庁所管」国有林「公有林」という言葉はグラフ1の右側の円グラフのところにでてくるが、このグラフは、単に右の三種類の林が「森林面積」全体の中でどれくらいいるかを示しているかを示したものにすぎず、三種類の林にあるスギの比率は、グラフをいくら見てもわからない。したがって、ウの文の内容は正しいかどうか「判断できない」ということになる。

エ 「現在でもスギは珍しくない」は、グラフ3から正しいと判断できる。また、文章Ⅰの最終段落や文章Ⅱの最終段落にスギの植林が盛んだと述べられていることも、そのことを裏づけている。そして「高度経済成長期においては、その製材は現在に比べると高値で取引されていた」については、文章Ⅱの最終段落には、「50年ほど前、当時高値で売れた杉」という記述がある。文章Ⅱは「二〇二三年」に新聞に載ったものだとあるので、その「50年ほど前」は一九七〇年代前半ということになるが、この時期が「高度経済成長期」と呼ばれる時期に含まれているということは、受験生にとつての常識的な知識であろう（高校での日本史や現代社会、政治・経済の授業などで習っているはずだ）。かりにそうした知識がなかったとしても、文章Ⅲの第2段落冒頭に、木材需要がピークに達したのは「高度成長期」の「一九七三年」だとあるので、ここから一九七〇年代前半＝高度経済成長期」ということが判断できる。これらのことからわかるように、エの文は「正しい」内容を述べたものである。

以上のことから、ア＝「誤っている」または「判断できない」、イ＝「正しい」、ウ＝「判断できない」、エ＝「正しい」ということがわかる。したがって、正解は②である。なお、右に説明したとおり、アについては「誤っている」なのか「判断できない」なのか厳密な意味では確定できない。しかし、エについて判断が確定できれば、正解は②しかないということがわかる。選択肢問題では、こうした総合的な判断が要求されることもあるという

ことを覚えておこう。

問2 四つのグラフから読み取れることを述べた文の正誤を判定する問題

ア、エの各文を検討する前に、傍線部の「当時」というのがいつ頃のことを指しているのかを確認しよう。傍線部に至る部分を読むと、「当時」というのは、文章Ⅰに登場する「武井沙織さん」が「大学在学中」だった時期のことを指しているとわかる。武井さんは高校卒業後、そのまま大学の農学部に進学したようだから、「当時」とは武井さんが二十歳前後の頃だったのだろうと推測できる。そして文章Ⅰの第1段落には、この文章が新聞に掲載されたときの武井さんの年齢について「44」という記述があり、文章の後には、この文章が新聞に掲載されたのは「二〇二三年」だと書かれている。以上のことから、「当時」というのは二〇〇〇年前後のことを指しているのだろうと判断できる。

このことを踏まえたうえで、ア、エの各文を四つのグラフと照合し、二〇〇〇年頃の「日本の森林・林業・木材」についての説明として正しいかどうかを判定していけばよいのだが、慣れていないと厄介に感じられるのが、グラフの見方である。グラフの中には、複数の事象の量や変化を同じ画面上に表示することで、それらの量や変化の関係を示そうとするものが多い。たとえば今回のグラフ2の場合、「国産材供給量」の変化はグレーに塗られた部分で示され、その数値はグラフの左側のタテ軸に「万m³」の単位で示されている。それに対して「木材自給率」の変化の方は、太い折れ線で示されており、その数値はグラフの右側のタテ軸に「%」で示されているという具合だ。そしてグラフ4も、このグラフ2と似たスタイルになっているが、こちらの方はグラフ2よりもさらにわかりにくいかもしれない。このグラフ4の読み方については、以下のイについての解説のところで、具体的に説明する。

ア 「木材の自給率」に言及している文なので、「木材自給率の推移」が示されているグラフ2に注目する。すると、「木材自給率の推移」は太い線の折れ線グラフで示されており、二〇〇〇年頃の自給率はおよそ20%ほどだとわかる。これは言うまでもなく、「5割を下回っていた」ということだ。

したがって、アは正しい説明である。

イ 「バルブ・チップ用材の需要量」と「製材用材の需要量」について示されているのはグラフ4。これを見ると、二〇〇〇年頃の「製材用材需要量」を示すグレーの部分(グレーの部分のうち一番下の部分)の最上部がおおよそ4000万m³あたりになっており(グラフの左側のタテ軸の数字を参照)、同じく「バルブ・チップ用材需要量」を示すやや薄いグレーの部分の最上部がおおよそ8000万m³あたりになっている。しかし、4000万に対して8000万だから「2倍ほど」だ、などと考えるはいけない。グラフ4の欄外の一番下に「ピーク時(1973年)の木材需要量の総量は、約12000万m³」とあるのに注意しよう。つまりこのグラフでは、「木材需要量の総量」の変化がグレーの部分の最上部の折れ線によって示されており、その「総量」のうち、「バルブ・チップ用材の需要量」や「製材用材の需要量」などがどのくらいの割合かということが、グレーの濃淡によって示されているのである。そのことを確認したうえであらためてグラフを見ると、二〇〇〇年頃の「木材需要量の総量」は10000万m³弱で、そのうちの「バルブ・チップ用材需要量(≡薄いグレーで示された部分)」と「製材用材需要量(≡それよりも濃いグレーで示された部分)」との割合はほぼ同じだということがわかる。したがって、傍線部の「当時」の「バルブ・チップ用材の需要量」は、「製材用材の需要量の2倍ほど」だったわけではない。このイは誤りである。

ウ 「国土面積における森林の面積と農地の面積の比率」については、グラフ1の左側の円グラフに示されている。しかし、その比率が時代の流れの中でどう変化してきたかといったことは、どのグラフにも示されていない。つまり「国土面積における森林の面積と農地の面積の比率が逆転しはじめた」のはいつ頃かということも、そもそもそうした「逆転」があったのかどうかということも、どのグラフを見てもまったくわからないのである。したがって、ウの文は正しいものではないといえる。

エ 「国産材の供給量」が時代の流れの中で「少なくなっ」たかどうかを検討するのだから、「国産材供給量」の「推移」が示されているグラフ2を参照する。ここでは、一九五五年から二〇一〇年までの「国産材(用材)

供給量」が、グレーの部分の高さの変化によって示されている。そして「高度経済成長期」とは、この「設問解説」の問1のエについての解説中で確認したとおり、一九七〇年代前半を含む時期である。そして、その時期に比べれば、二〇〇〇年頃の「国産材(用材)供給量」は、明らかに減少している。したがって、このエは正しい説明である。

以上で見てきたとおり、正しいことを述べた文はアとエである。したがって、正解は③ということになる。

問3 すべての文章・グラフから読み取れることの正誤を判定する問題

設問では、「文章Ⅰ」～「文章Ⅲ」および「グラフ1」～「グラフ4」を読んで、わかったこと」を語った発言として「誤っているもの」を「二つ」選ぶことが要求されている。したがって、各選択肢をすべての文章・グラフと照合し、正誤を判定しなければならぬ。それぞれの選択肢について検討してみよう。

① 「木材は私たちの生活に欠かせないものだ」というのは、常識的に考えて間違いとはいえない。また、文章Ⅰの最終段落に、「建設用材」として木材を「確保」する必要があることや、「持続可能な森林」を作る必要があることなどが書かれていることから、「木材は私たちの生活に欠かせないものだ」ということは否定できない。そして林業に「さまざまな問題がある」ということは、三つの文章すべてで述べられている。したがって、この①は正しい内容を述べたものだとわかる。

② 「日本にはスギやヒノキが多い」は、文章Ⅰの最終段落や、グラフ3から正しいと判断できる。そして「少ない種類の樹木を集中して植えることが災害時の砂防機能を低下させる」は、やはり文章Ⅰの最終段落にある「樹種が偏って根の張り方も一様に」と「災害時に砂防の機能を果たせない」という記述に即している。②も正しい内容である。

③ 「いま、少ない樹種が植えられることの多い人工林を減らして、天然林を増やそう」という政策がとられている」とあるが、そうしたことは、三つの文章のどれにも書かれていないし、どのグラフからも読み取れることは

きない。グラフ3には「人工林」と「天然林等」との比率が示されているが、その比率を変えようという「政策」があるといったことは、どの文章にもグラフにも無縁な内容である。したがって、この③は「誤っているもの」であり、正解である。

④ 「日本の木材需要量は増加の一途(＝一つの道、一つの方向)をたどってきた」が誤り。「木材需要量」については、グラフ4にその推移が示されているが、一九七三年のピーク時以降、概ね減少傾向を示している。途中、増加した時期もあるが、その後は減少している。さらに二〇〇八年頃からはまた増加してもいるようだが、これを「増加の一途をたどってきた」ということはできない。したがって、この④は「誤っているもの」であり、正解である。

⑤ 「いまある山林を私たちにとってより望ましいものにする」べきだというのは、文章Iで「武井沙織さん」、文章IIで「古川拓さん」が訴えていることを端的に述べたものである。そして「山林の放置は自然災害にもつながる」は、文章IIの第3段落に述べられていることと同じ。したがってこの⑤は、正しい内容である。

⑥ 森林が「私たちの身近にあるもの」であり「大きな可能性をもっている」というのは、文章Iの最終段落にある「身近にある森林という『宝』を言い換えたもの。そして「持続可能な森林を作り出すことは、その可能性をひろげることでもある」というのは、やはり同じ段落に「持続可能な森林を人の手で作る」ことは「身近にある森林という『宝』をもっと生かす」ことでもあるとされていることに通じる。したがって、この⑥は正しい内容を述べたものである。

22 「外来生物」

設問	問3		問2	問1	正解	配点	自己採点
	(ii)	(i)					
問4	③	①	④	③	⑤	4	
自己採点合計	4	4	4	4	4		

【出典】

【資料I】は環境省と農林水産省が作成した「特定外来生物被害防止基本方針」の「第1 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する基本構想」に含まれる「2 課題認識」の一節である。

【資料II】は国立環境研究所の社会対話・協働推進オフィスによるコラム「五箇さんに聞く! 『外来種』は悪者?」―「外来種問題」から学ぶ、自然との向き合い方―の一節である。コラムに登場する五箇公一(ごかこういち)は昆虫学者・生態学者。著書に「これからの時代を生き抜くための生物学入門」(辰巳出版)などがある。

【グラフ1】～【グラフ3】は北海道旭川市が市民を対象に行った「外来生物に関するアンケート」から、その結果の一部を引用したものである。

【資料解説】

【資料I】は外来生物が与える影響およびその対策に関する基本的な考え方を示したものである。第1段落では、外来生物が自然環境や私たちの生活に、多岐にわたる影響を及ぼしていることを述べ、その対策の必要性を訴えている。第2段落では、外来生物が与える影響は不可逆的なものであり、かつ個体数の増加に伴い影響が大きくなる可能性があることを指摘している。そして、外来



9784777227648

ISBN978-4-7772-2764-8
C7381



1927381000001

SERIES

国語

現代文

解答・解説編



KAWAI PUBLISHING

学
年

組

番
号

名
前